

母親の療育スキル獲得が及ぼす ASD 児の問題行動への影響

- 母親に対するビデオを用いた介入を通して -

○小笠原忍

(明星大学大学院人文学研究科)

KEY WORDS: 自閉症スペクトラム障害

竹内康二

(明星大学心理学部心理学科)

問題行動 機能的アセスメント

(目的)

本研究は、自閉症スペクトラム障害(以下 ASD とする)児をもつ母親に対して、ビデオを用いた介入を行うことにより母親の療育スキルの獲得を促す。さらに母親の療育スキル獲得により参加児である ASD 児の問題行動を減少させることを目的とした。

(方法)

参加児：ASD の診断を受けた男児 1 名 (以下 A 児とする) とその母親が本研究に参加した。研究開始時における A 児の生活年齢は 3 歳 4 ヶ月であった。生活年齢 3 歳 2 ヶ月の時に行った新版 K 式発達検査の結果は、姿勢・運動 46 ヶ月、認知・適応 37 ヶ月、言語・社会 46 ヶ月、全領域 41 ヶ月であった。A 児は母親と一緒に食事する場面 (以下食事場面とする) にて食べ物を投げる行動と、母親が A 児を呼ぶ場面 (以下呼ぶ場面とする) にて逃げる行動の 2 つの問題行動を示していた。

指導場面：A 児は週に 1~2 回 ABA 療育を受けていた。その療育中にて問題行動が生じる両場面を設定し本研究を実施した。

問題行動の機能的アセスメント：A 児の示す食事場面での食べ物を投げる行動は、母親の叱責により注目が得られることや食事が回収されることにより食事を回避することができるために強化されていると考えられた。呼ぶ場面での逃げる行動においても、母親が追いかけることにより注目が獲得できるため強化されていると推察された。そのため、母親には以下に示す療育スキルを実施してもらった。A 児の食べ物を投げる行動が生じた場合には「拾って」と指示し洗って皿に戻すこと、また食べ物を口に運ぶ行動が生じた場合には時折褒めたり話しかけたりすることとした。逃げる行動が生じた場合には追いかけてせず母親の前につれてくること、また自発的に母親の前に来る行動が生じた場合には褒めたりくすぐって少し遊んであげることとした。機能的アセスメントによる分析記録を Table 1 に示した。

Table 1. 機能的アセスメントによる分析記録

随伴性	場面	先行事象	行動	結果事象(行動の機能)
問題行動が生じている時	食事場面	・食事よりやりたいことがある	・食べ物を投げる	・食事が回収されやりたいことができる(回避)
	面	・母親からの注目が		・母親が叱責する(注目)
	ない			
	呼ぶ場面	・母親が名前を呼ぶ	・逃げる	・母親が追いかける(注目)
	面			
機能的アセスメントに基づき提案した療育スキル	食事場面	・食事よりやりたいことがある	・食べ物を投げる	・母親が「拾って」とA児に指示し洗って皿に戻す
	面	・母親からの注目が	・食べ物を口に運ぶ	・母親が時折褒めたり話しかけることで注目を与える
	ない			
	呼ぶ場面	・母親が名前を呼ぶ	・逃げる	・母親の前につれてくる
	面		・母親の前に来る	・褒める

標的行動：A 児は食事場面にて食べ物を投げる行動と呼ぶ場面にて逃げる行動の 2 つの問題行動を標的行動とした。母親は問題行動の機能的アセスメントに記した療育スキルを標的行動とした。

手続き：両場面ともベースライン、言語プロンプト介入、プロープ①、ビデオ介入、プロープ②で構成した。

ベースライン：両場面にて A 児及び母親の標的行動が生起するか否かを観察した。

言語プロンプト介入：介入の前に両場面における機能的アセスメントに基づいた分析結果を母親に教示し承諾を受けてから介入を行った。介入では母親の標的行動の生起を促すために言語プロンプトを行った。

プロープ①：ベースラインと同様の手続きで行った。

ビデオ介入：両場面の様子をビデオ撮影しその映像を使用した。母親はその映像を見ながら標的行動をいつどのよう

に生起させるべきかを学習させる訓練を行った。

プロープ②：ベースラインと同様の手続きで行った。

(結果)

両場面における A 児及び母親の標的行動の生起の推移を Figure1,2 に示した。両場面とも言語プロンプト介入にてベースラインで生起していた A 児の標的行動は減少し、生起していなかった母親の標的行動は増加した。しかしプロープ①に入ると、標的行動の維持が示されなかった。母親に対するビデオ介入実施後のプロープ②では再び A 児の標的行動は減少し、母親の標的行動は増加した。

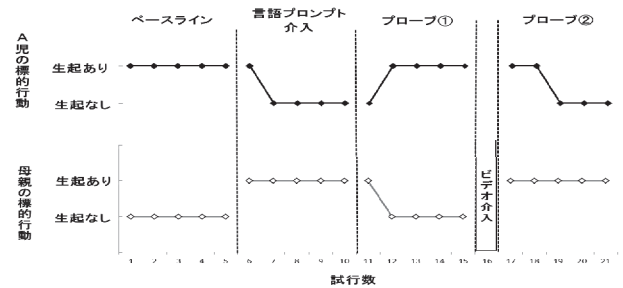


Figure1. 食事場面におけるA児及びその母親の標的行動の生起の推移

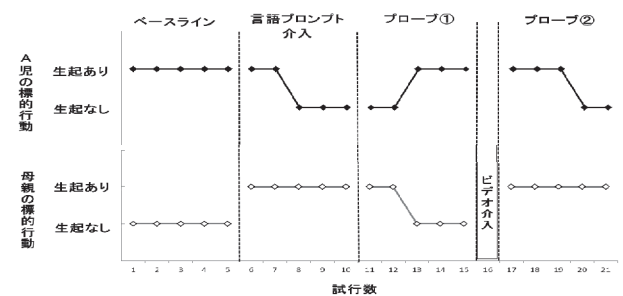


Figure2. 母親がA児を呼ぶ場面におけるA児及びその母親の標的行動の生起の推移

(考察)

両場面とも言語プロンプト介入後のプロープ①にて標的行動の維持が示されなかった。これは母親の標的行動が A 児の標的行動に応じて生起したのではなく、言語プロンプト介入における言語プロンプトに対して生起した可能性が推測される。よって言語プロンプトが提示されないプロープ①にて母親の標的行動が生起しにくく、それに伴い A 児の標的行動が増加したのであろう。しかし、母親に対するビデオ介入後のプロープ②にて再び A 児の標的行動は減少し、母親の標的行動は増加した。これに関しては A 児の標的行動が視覚的に提示されるビデオ介入により、A 児の標的行動に応じて母親が自身の標的行動を生起することを学習させることができたためであると考えられる。

(OGASAWARA Shinobu, TAKEUCHI Koji)